

(別紙様式3)

令和2年3月28日

## 研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 東京都小平市たかの台2番1号  
管理機関名 学校法人 創価学園  
代表者名 理事長 原田 光治 印

令和元年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

### 記

#### 1 事業の実施期間

平成31年 4月 1日 (契約締結日) ~令和2年 3月31日

#### 2 指定校名

学校名 創価高等学校  
学校長名 塩田 誠一郎

#### 3 研究開発名

言語技術を磨き、地球規模課題解決に取り組む能力育成プログラム

#### 4 研究開発概要

以下の3本柱で研究開発を行う。

○【言語技術】

日本語と英語を往還させ、言語技術に裏打ちされた論理的・批判的思考力の育成

○【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト (GCP)】

全校生徒を対象に、探究型学習による地球規模課題の理解力の育成

○【グローバル・リーダーズ・プログラム (GLP)】

選抜生徒を対象に、英語を中心とした高度な批判的思考力、協調的問題解決力を有したリーダーの育成

#### 5 研究開発の実績と説明

以下の(1)～(8)の項目として報告を行う。

(1) 実施日程

(2) 言語技術 (全校生徒対象のプログラム)

(3) グローバル・シチズンシップ・プロジェクト (GCP) (全校生徒対象のプロジェクト)



事実や経験をもとにした説得力のあるサポーターセンテンスの作り方。

- ③「情報伝達」の技術…「情報を整理分類する」「ラベリングする」「空間的・時間的秩序の原則」等の情報を分かりやすく伝える方法。

※思考を広げ、論理的な文章に組み立てる手法として、「マッピング」を活用した。

※高校生活のキャリアデザインを文章化する「パーソナル・エッセイ」作成の指導を行った。

※課題作文に関しては、1年間で日本語が15本ほど、英語で5本ほど書かせ、教員が一人ひとり丁寧に添削・コメントし、フィードバックした。

## 1年生 年間実施項目・内容

### 1学期

1	・言語技術とは何か ・問答ゲーム(好き嫌い、立場限定、ナンバーリング、選択)
2	・問答ゲーム(賛成反対) ・英語問答(好き嫌い、立場限定、ナンバーリング・選択・賛成反対)
3	・問答ゲーム【日英】
4	5W1Hを意識した例文添削 ・問答ゲーム(5W1Hで質問を返す・2往復)
5	・英語問答(5W1Hを使った質問の作り方・「How」の特徴・5W1Hで質問を返す)
6	・問答ゲーム【日英】(相手の応答の正しい掘り下げ方、3往復の問答)
7	・パラグラフとは何か ・パラグラフの構成要素(TS、SS、CS) ・作文課題(優先席、電子辞書)
8	・作文課題(コンビニ24時間営業) ・TSを支えるSSの作り方 ・作文課題をリライトする
9	・英文パラグラフ(コンビニ24時間営業) ・文と文をつなぐ表現(linking words)

### 2学期

1	・問答ゲーム、パラグラフの復習・作文課題(チャイムは必要か)
2	・交渉の技術 ・反論の技術
3	・事実と意見の区別(日英) ・論拠の確認
4	・議論の実践(日本語)
5	・議論の実践(日本語・英語)
6	・作文内容の素材集め ・SSの掘り下げ ・課題作文(自分で自由にテーマ設定)
7	・TSの性質を確認 ・TS作成の実践
8	・マッピング ・作文課題(自分の性格・特徴を紹介)
9	・パーソナルエッセイの書き方(複数のパラグラフで文章を書く・素材集め・TS作成)

### 3学期

1	・説明の技術①(情報の整理分類、ラベリング) 【キャンプの持ち物・会議の持ち物】
2	・説明の技術②(概要から詳細) 【机の並び方・道案内】
3	・説明の技術③(時間配列の原則) 【ピザトーストの作り方】
4	・英語で物の作り方を説明する
5	・説明の技術④(空間配列の原則) 【国旗の描写・服装の描写】
6	・1年間の振り返り(問答ゲーム・技術を2つ挙げてパラグラフ・ライティング)

〈2年生〉

以下の3つの技術を日本語と英語でトレーニングした。

- ①「情報分析」の技術…対象物としての絵やテキストに書かれた情報を証拠として取り上げ、それらを総合して解釈を示す方法。
- ②「認知」の技術…絵・テキストを用い、1つの対象物に対して複数の視点に立つ方法。
- ③「議論」の技術…論理の組み立て方・立論の立て方・反論の方法・ディベートの実践。  
 ※「議論」の技術をもとに、GCP企画「人権ディベート」を3学期に行った。  
 ※校内の進路指導部と連携し、大学の志望理由書作成の指導を行った。  
 ※修学旅行先の青森県について研究し、ポスターセッションを行った。

2年生 年間実施項目・内容

1学期

1	・ガイダンス
2	・描写①
3	・描写②
4	・イラストの分析
5	・絵画の分析①
6	・絵画の分析②
7	・詩の分析①
8	・詩の分析②
9	・小説の分析①
10	・小説の分析②

2学期

1	・漫画による視点変更1 (赤ずきん)
---	--------------------

2	・漫画による視点変更2 (赤ずきん)
3	・テキストの視点変更1 (動詞の変化・英語)
4	・テキストの視点変更2 (振返り・事実整理)
5	・テキストの視点変更3 (年表作成)
6	・テキストの視点変更4 (歴史執筆)
7	・テキストの視点変更4 (歴史執筆 続き)
8	・論理1 (三段論法の練習)
9	・論理1 (答え合わせ)
10	・論理2 (論理の飛躍・隠された前提) 英語との往還
11	・反論の方法

### 3学期

1	・ディベートのルール確認 ブレインストーミング
2	・ディベート練習① 日本語
3	・ディベート練習② 日本語
4	・ディベート練習③ 英語
5	・ディベート練習④ 英語
6	・立論(小論)執筆 「型」の解説・執筆

### 〈その他〉

①生徒に毎時間、授業で学んだことを記入・ファイリングさせ、ポートフォリオを作成させた。

②創価中学校、東京創価小学校と定期的に「言語技術」推進会議を開催し、小中高12年間を通して「言語技術」を学ぶ教育課程を策定した。各校の連動性を図りながら、創価中学校、東京創価小学校においても「言語技術」の授業を開始した。具体的には、今まで高校で行っていた言語技術の内容の大半を中学校の課程に移動し、高校では更に高度な能力の育成を目指す。小学校では国語の授業の中で、6年間のカリキュラムを組み、小学校でも出来る内容を2018年度より開始している。

### (3) グローバル・シチズンシップ・プロジェクト (GCP) (全校生徒対象のプロジェクト)

①全校生徒を対象に総合学習の一環として行う。国連が提示する地球規模課題(Global Challenges)を中心にテーマを設定し、協働的な学びの手法を取り入れ課題探究に取り組んだ。

②1年生はSDGs・環境・貧困を、2年生は戦争・冷戦後の紛争・人権を、3年生は国際パー

トナーシップ（模擬国連）をテーマに設定した。

- ③実施にあたっては、生徒で構成する GCP リーダーズが運営を担い、生徒が主体的に運営することで、リーダーシップと行動力を育んだ。
- ④2年間の言語技術と GCP の集大成として、3年生は「ファイナル・プロジェクト」を実施した。ファイナル・プロジェクトでは、「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の 17 のゴール（SDGs）からテーマを設定し、地歴公民科と国語科、英語科の教科横断で課題研究に取り組み、日本語・英語でのポスターセッションと、2,000 字以上の日本語論文と、英語による要旨の作成を行った。受験生を除いた高校3年生全員（約7割）が取組み、ひとり一人が日本語と英語のポスターセッションを行った。これは一般公開され、また後輩への公開も行うことも引き続きおこなった。
- ⑤2020年度から年次進行で実施する「総合的な探究の時間」の策定のため、学校として「探究科」を2019年度より設置した。このメンバーは SGH 担当教員でなされ、今まで行って来た SGH の GCP 企画を「総合的な探究の時間」で引き継げるように計画を開始した。
- ⑥3年間の GCP 企画を通しての、ワークシートやレポート・論文等をまとめて、ポートフォリオを作成した。
- ⑦国内外の識者を招聘し、グローバルセミナー、懇親会を実施した。

（主な2019年度の実績）

5月 マカオ大学国際部・シンディ氏

米国パデュー大学・ヌニェス教育学科長

6月 タイ・チュラロンコン大学一行

アメリカ創価大学首脳

フィリピン・イースト大学看護学部長、

中国・首都師範大学、南開大学、北京教育学院教授、大学院生一行

7月 米国・国際教育リーダーシップ協会（ICPEL）ジェームズ・ベリー理事

※SGHの指定校見学として創価高校を視察。

10月 ウズベキスタン国立大学総長、日本外務省職員

11月 英国ケント大学ヒュー・マイアル国際関係学部名誉教授、

元ブラジル大使・外務省参与

中国・首都師範大学初等教育研究所教職員一行

カリフォルニア大学サンフランシスコ校看護学部マリアン客員教員

1月 フィリピン・国立中央ミンダナオ大学ヘスス学長

- ⑧課題であった「普及」に関する対応は、SGHに関わる教育の公開回数大幅に増やした。具体的には全校生徒対象の GCP 企画の一般公開を年6回実施した。さらに、10月には学園祭でポスターセッションを一般公開した。11月は中間報告会も同日に行った。1月の一般公開は3年間の成果を全員が発表するファイナル・プロジェクトを一般公開、2月は活動報告会と GCP 企画を一般公開した。また、UNHCR WILL2LIVE 映画祭の学校パートナーズとなり、生徒のみならず一般公開で映画の上映を行い、研究発表の場も設けた。一般公開の全てにおいて運営指導委員と大学教授などのアドバイザー、管理機関より進捗状況を確認し、意見交換を行った。

以下の表は、G C P 一般公開の年間実施項目と内容である。

テーマ		1年生	2年生	3年生
テーマ		貧困	戦争	模擬国連(1)
1 学期	5 月 18 日	グループ学習(ジグソー法) 国連が定めた「2030アジェンダ」について、ジグソー法を用いて理解を深め、地球規模課題への関心を高める。	VTR学習 第二次世界大戦時のフィリピン・レイテ島決戦をめぐる日本兵・アメリカ兵・フィリピン人の戦争証言を通して戦争の実態を学ぶ。	模擬国連レクチャー・準備 模擬国連のやり方を学び、議題について学習したり、国別にスタンスペーパーやスピーチなどの準備を行う。
	6 月 15 日	貿易ゲーム 「先進国」「新興国」「発展途上国」の3つの立場から世界の貿易や格差を疑似体験し、協調して課題解決に取り組む。	グループ学習(ジグソー法) 原爆投下による被害の事実を知り、アメリカと日本の核兵器へのスタンスを整理しながら、核兵器廃絶への可能性を探る。	模擬国連 6人1組のチームをつくり、「気候変動枠組み条約(COP)」を議題に15か国の担当に分かれて模擬国連をクラスごとに開催する。
テーマ		環境	異文化理解・ 現代の紛争	模擬国連(2)
2 学期	10 月 16 日	いのちの食べ方を問う 食肉の加工過程を振り返りながら、身近な食品ロスの現状からバーチャルウォーター、フードマイレージなどの環境問題を考える。	留学生交流 創備大学に学ぶ留学生約50名に來校していただき、交流を行う中で、異文化に触れ、理解を深める。	模擬国連 仮想の国を設定し、「核軍縮」をテーマに模擬国連をクラスごとに開催する。
	11 月 30 日	ロールプレイ 「世界がもし100人の村だったら」をテーマにロールプレイを行い、国際社会が抱える格差について体験的に学ぶ。	グループ学習(フィッシュボーン) 第二次世界大戦後の世界の紛争についての実態(ルワンダ内戦における「大量虐殺」)を知り、なぜ過ちは繰り返されてしまうのかを考える。	
テーマ		格差・ 国際パートナーシップ	人権	Final Project
3 学期	1 月 18 日	模擬教育援助会議 途上国側と援助国側に分かれて、模擬教育援助会議をクラスごとに実施。途上国の教育の現状と教育援助のありかたを考える。	グループ学習(人権すごろく) 「人権すごろく」「世界人権宣言」を通して、長い歴史の中で民衆が勝ち取ってきた人権への理解を深める。	Final Project ポスターセッション アジェンダ2030・SDGsの中からテーマを選び、「現代社会」と「英語表現」と「現代文」の協同で日本語・英語によるポスターセッションと論文作成に取り組む。
	2 月 22 日	SDGs Card Game 本校が開発したSDGsを体験的に学ぶためのカードゲームを実施。先進国・新興国・途上国の9か国にわかれ、自国の課題や地球規模課題を連携・協力して解決していくゲームを通して、SDGsについて学ぶ。	ディベート ディベートを通して身近な人権について考える。また創立者の人権闘争を学び、生活の中で他者の人権を尊重するための方途を探る。	UNHCR WILL2LIVE映画祭 学校パートナーズ上映会「シリアに生まれて」 国連UNHCR協会が主催する「WILL2LIVE映画祭」の学校パートナーズとして上映会を開催。「シリアに生まれて」を鑑賞する。

#### (4) グローバル・リーダーズ・プログラム (GLP) (選抜生徒20人対象のプログラム)

- ①高校2・3年生の希望者から20名を選抜した。昨年の16名より人数を増やした。課題であった選抜クラスの生徒数を増やした。
- ②「核廃絶」を中心に、より高度な課題研究に取り組み、SDGsの内容をより深く学び、学校全体で行っているG C Pへ還元した。
- ③毎週金曜日の18時から19時30分に開講し、土日や長期休暇にも活動した。また、3年生は学校設定科目「世界市民探究」で扱い単位とした。これによりSGH終了後も実施が可能となった。
- ④「知の理論」を中心としたI B教材もテキストとして参考にした。ビデオ会議アプリZoomなどを用いたオンラインでの講義も実施した。
- ⑤資質能力の変容の測定方法を業者テストにて行った。これはGLPで検証を行って全校生徒に展開したものとなった。
- ⑥3年生学校設定科目では、2021年度より開始される総合的な探究Ⅱ(2年生)を意識した授業をもちこんだ。
- ⑦GLP卒業生のネットワークを継続。GLP卒業生のほぼ全員(90名)が海外大学進学または

- 海外留学をおこなっている。今後の相互の支え合いと留学による知見を現役生にもたすために、GLP 卒業生のネットワークを確たるものとする。これは SGH 終了後も継続する。
- ⑧広島と長崎で実施されたフィールドワークでは平和教育の実態調査を目的とし、インタビューを中心に情報収集の技術力を向上させた。またアンケート調査を実施し、その分析においては論理的・批判的思考力を高めた。
- ⑨報告会は英語での実施を基本とし、Skype や YouTube などの SNS を利用して海外との交流や情報発信を行った。
- ⑩GLP を通じて学んだことを広げるため、創価中学校 1 年生（220 名）に対して、「核廃絶問題」に関する出前授業を実施した。
- ⑪研究成果として核と SDGs をはじめとした問題についての英語小論文を作成させた。
- 以下の表は、年間の実施項目と内容である。

日程	プログラム内容	探究・発表等の手法
春期休業	集中講義：年間計画の確認、ワールドカフェ	iPad 配布（貸与）
4 月	Critical issues forum(CIF)参加 (3/27～4/1、代表 2 名)	カリフォルニア・モントレー
	ミニポスターセッション	グループワーク
	連続講座「核廃絶問題の基礎」	英語資料活用
	言語技術「質問の仕方・報告書の書き方」	グループワーク
5 月	言語技術「インタビューのスキル」	グループワーク
	講義「教育学とは」 講師：パデュー大学 ヌニェス博士	
	授業「研究手法：統計・データ分析のスキル」	グループワーク
6 月	授業「核兵器禁止条約」	質問作り
	ディスカッション「リサーチクエスチョン作成」	グループワーク
	授業「現代の核兵器事情と人間の安全保障」	
	国連大学(UNU)研修 講演「SDGs と人間の安全保障」 講師：UNU サステイナビリティ高等研究所 今井夏子氏	
7 月	ディスカッション「夏季フィールドワーク準備（アンケート項目・インタビュー項目検討）」	グループワーク
夏季休業	フィールドワーク 広島(8/6～8/8) 長崎(8/21～23)	
9 月	授業「ポスターの作り方」	
	フィールドワーク 都立第五福竜丸展示館 外部フォーラム 「核兵器なき明日への選択」 参加	
	「世界学生サミット高校生ポスター発表」 参加	プレゼンテーション
	ポスター発表「リサーチトピック研究結果」（一般公開）	ポスターセッション



10月	ミニポスタープレゼンテーション「最新技術と倫理」	3年生のみ実施
	論文テーマ作成・ディスカッション	教員とディスカッション
11月	作業「CIF ミニプロジェクト作成」	グループワーク
	講義「平和学・紛争解決学」 講師：ケント大学 マイアル博士	
	授業「模擬授業に向けて：授業案とは」	
	中間報告会「リサーチトピック研究結果」（一般公開）	プレゼンテーション
12月	「関東甲信越静地区探究学習発表会」参加	プレゼンテーション
	講義「核廃絶問題」 講師：ミドルベリー大学院 トキ氏	
冬季休業	授業案作成	
1月	作業「CIF ミニプロジェクト作成」	
	出前授業準備	グループワーク
	高校教員へ模擬授業	
	創価中学校での出前授業実施	
2月	2019年度 CIF 準備	
	GLP 最終発表会	プレゼンテーション
	活動の振り返り・評価	自己評価、相互評価

(5) 英字新聞プロジェクト（希望者対象のプロジェクト）

本年度41名（1年生13名 2年生20名 3年生8名）

英字新聞の作成を通し、英語力・発信力を高めるとともに、取材や新聞作成を通じ、社会や世界との関わり方、情報活用能力、チームによる計画実行能力等を涵養することを目的として実施。

- ・ 1回目 11月14日（水）講義：ジャパントイムズ編集局長の大門小百合氏
- ・ 2回目 11月17日（土）講義：報道部デスクエディター内藤陽介氏
- ・ 3回目 12月19日（水）講義：ジャパントイムズ編集企画部・部長の松谷実氏
- ・ 4回目 1月24日（月）講義：週刊STの高橋敏之編集長
- ・ 5回目 3月9日（土）講義：ジャパントイムズの大門小百合編集局長
- ・ YLP交流会 2月2日（土） 於：ジャパントイムズ本社

本年度は、英字新聞プロジェクト（YLP）を行っている他校との交流が初めて実現した。今回は横浜雙葉高校との交流となり、互いに完成した新聞を見せ合いながら、工夫した点や苦労した点をプレゼンし合った。



## Nuclear threat class by students for students

創価学園初の試み:高校生から中学生へ核廃絶に向けての出前授業

On Dec. 20, the Global Leaders Program (GLP) members taught a class about nuclear issues to first year students at Soka Junior High School. GLP members had prepared for the class for five months. It was the first time for GLP to have a class about abolition of nuclear weapons.

The purpose of this class was to enable students to logically explain why nuclear weapons are harmful and why they should not hold or use nuclear weapons by learning about the limit of nuclear deterrence theory and the inhumanity of nuclear weapons empirically.

GLP consists of 16 members selected from second- and third-year students of the high school. Every Tuesday and Friday after school, they learn about nuclear abolition for about two hours.

They taught juniors the situation surrounding nuclear weap-

ons by using the video GLP made. It showed opinions on nuclear deterrence theory of both nuclear-holding states and non-nuclear holding states. Additionally, they did a simulation game, which was based on the incident that took place between the Soviet Union and the U.S. in the past. The GLP then told students the danger of nuclear weapons, giving five questions about damages that nuclear weapons truly cause. At the end of the class, they asked the students, "What can we do?" The aim of this class was for participants to think what they can do to solve nuclear issues by themselves. However, the lesson didn't yield direct solutions, and thus each student would need to analyze it. GLP members also want to seek out strategies and contributions to the abolition of nuclear weapons.



Junior high school students exchanged opinions on the reason why North Korea possesses nuclear weapons with fact sheets on the country's internal affairs, military affairs and diplomacy.

After the class, one of the GLP members said, "Through this experience, I realized that I need to study more about not only nuclear issues, but also various international problems." Another GLP student mentioned that at first, this effort was to make the content understandable for junior high school students, but at the same time he could organize his knowledge of nuclear issues.

Soka Gakuen Times also asked junior high school students about

their impressions of the class.

One of them said, "These issues seemed very difficult to learn. However, today's class was well arranged, so I was able to think about these issues deeply." Additionally, some participants mentioned that this class has changed their mind. "Before taking this class, I was thinking that nuclear deterrence is reliable. But through this class, I realized the vulnerability that nuclear deterrence possesses."

### (6) 時間管理手帳 (全校生徒対象のプロジェクト)

SGH 取り組みの一つとして、生徒の時間管理能力を育成し、PDCA サイクルを習得させるため、時間管理手帳を全生徒に配付して活用した。キャリア教育推進委員会 (月 1 回程度開催) での協議をもとに、学年ごとに計画的に生徒への指導・激励を行った。

当初、今年度入学した 1 年生については、主体性等を評価することを目的として、各生徒のポートフォリオの記録を「JAPAN e-Portfolio」経由で受験大学に提出することが本格化すると想定された。そこで、新たに〈Portfolio Note〉を併用して、高校生活の学びと活動の記録をとらせるように発展的な活用を研究した。毎週末 (金曜日もしくは土曜日) の帰りの SHR で〈スコラ〉の振り返りを記入、毎月第一週の金曜日の朝の SHR で〈Portfolio Note〉を記入するというリズムで、記録と振り返りを図り高校生活の PDCA 化を推進した。そして、3 学期には 1 年生全員に「JAPAN e-Portfolio」への入力を行わせた。

学園祭では校内手帳甲子園を実施し、第 7 回手帳甲子園東京大会 (主催: NOLTY プランナーズ) に本校より 25 名を出展した。(全国 1 位獲得)

(7) その他

① 国内外フィールドワーク（全校生徒より希望者対象）

GCP、GLP で定めた各テーマに則り、カリフォルニア、沖縄、広島、岩手、東京（国連大学、国立ハンセン病資料館、JICA 等）で行った。

2017年度より、都内のフィールドワークにおいては、各学年のGCP企画と、より連動した内容になるよう「JICA 地球ひろば」は1年生、「国立ハンセン病資料館」は2年生、「国連大学」は3年生対象へと組み換えた。これにより各学年での「机上で学ぶ」→「フィールドワーク」→「振り返り」→「発表」の流れに基づく学習計画が明確となった。

また海外フィールドワーク（カリフォルニア）は時期を夏季より秋季に変更し、現地高校生との意見交換および識者との交流、プレゼンテーションを行う。そこで学んだ内容は全校集会等で発表、またはポスターセッションの形式にて発表した。

2019年度のCIF（Critical Issues Forum）発表会は、コロナウイルス感染症のために中止となったが、大学院生によるオンラインチュートリアルを通じて、内容や発表について個別にアドバイスをうけた。また日本からの参加者とミドルベリー大学院スタッフとの交流会にも生徒2名が参加した。年度を超えて、2020年5月頃にはアメリカの参加校とオンラインで発表会を行う予定である。これらの経験により、海外の人との即時的な交流の可能性を改めて学ぶ事のできるものであった。

・カリフォルニア・フィールドワーク

期間：11月1日～11月7日（1～3年生 14名）

主な訪問地：南カリフォルニア大学、アメリカ創価大学、インターナショナルポリテクニクス高校、ノードホフ高校、ゲティ美術館、ロナルド・レーガン大統領図書館

目的：核廃絶問題と貧困問題をテーマに、現地・高校生や大学生の前でテーマごとにプレゼンテーションと意見交換をし、さらに一流識者の講義を受講した。

・岩手フィールドワーク

期間：7月23日～25日（1～3年生 12名）

主な訪問地：岩手県葛巻町・陸前高田市

目的：「環境問題」をテーマに、環境先進自治体である岩手県葛巻町を訪れ、クリーンエネルギー諸施設の見学や循環型農業を実感的に学んだ。また、8年前の3・11東日本大震災の際に大きな津波被害を受けた岩手県陸前高田市を訪れ、市役所ではレクチャーを受け、自然と共生する復興の様子を学んだ。

・沖縄フィールドワーク

期間：11月7日～9日 2泊3日（1～3年生 12名）

主な訪問地：ひめゆり平和祈念資料館、沖縄県立那覇国際高等学校、沖縄県平和祈念資料館、糸満市山城付近（ガマ）、沖縄国際平和会館

目的：唯一の地上戦であった沖縄戦の事実について、博物館見学や壕内部の見学、戦争体験聴講を通して学んだ。SGH高の沖縄県立那覇国際高校の生徒とテーマについて意見交換し、交流を深めた。

- ・広島フィールドワーク

期間：8月6日～8日 2泊3日（2年～3年生 12名）

主な訪問地：平和記念公園、広島女学院、広島大学

目的：広島女学院高校主催のピース・フォーラムに参加。地球規模課題の中から核兵器廃絶をテーマとして選び、高校生ができるアクションプランを考え、現地でのインタビューを行った。

- ・長崎フィールドワーク

期間：8月21日～23日 2泊3日（2年～3年生 8名）

主な訪問地：活水高校、長崎文化歴史博物館、長崎原爆資料館、平和公園、城山小学校、長崎大学核兵器廃絶研究センターRECNA

目的：活水高校を訪問し、国内唯一の平和学習部との交流会を行った。被爆の実相を学ぶことをテーマに、長崎原爆資料館、被爆を訪問し、大久保館長に長崎市の平和活動について包括的に講義を受けた。長崎市内での平和教育について学び、平和教育について街頭インタビューを行った。

- ・国立ハンセン病資料館フィールドワーク（東村山）

期間：2月16日（高校2年生 30名）

目的：国立ハンセン病資料館並びに多摩全生園を訪れ、ハンセン病回復者の方との交流を通して、ハンセン病の歴史的背景を学ぶとともに、人権を踏みにじられてきた体験者の痛みに触れ、自身の生き方や人権について考え、深める機会とした。

- ・JICA 地球ひろばフィールドワーク（市ヶ谷）

期間：8月31日（高校1年生 28名）

目的：「国際理解」をテーマに、青年海外協力隊の経験者による施設案内やレクチャーを受けた。世界の実情を体験的に学び、その解決の方途を探った。テーマディスカッションを通して、世界の諸問題に対する関心・理解を深め、国際協力のあり方を見つめ、また将来の進路選択の一助とした。

- ・国際連合大学フィールドワーク（渋谷区）

期間：①6月25日（高校2，3年生 20名）GLP生

②12月3日（高校3年生 13名）希望者

目的：「国際貢献・国際パートナーシップ」をテーマに、ここに訪れSDGs達成の鍵である17番目のゴール「パートナーシップで目標を達成しよう」について、実際の活動経験者や研究者から、その現状と具体的な取り組みの話の伺い理解を深めた。

- ・クリティカル・イシューズ・フォーラム（CIF）

※年度をまたがるものを掲載。

期間：2018年3月27日～2019年4月1日（3年生 男女1名ずつ、2名）

訪問地：アメリカ・カリフォルニア州モントレイミドルベリー国際問題研究所

目的：日米露の高校生による核軍縮に関する提案の発表会で、会議には、ロシアから3校、ア

アメリカからハワイも含め9校、日本から5校の代表生徒約2名ずつが参加し、核兵器の不拡散をテーマにプレゼンテーションやディスカッションを通して意見を交換した。また、4月の開催に向け、2年生のGLPのメンバーが核問題についての包括的な理解をまとめ、オンラインプレゼンテーションアプリ prezi で mini-project を作成。事前に提出し、MIISの研究者からフィードバックを受けた。

2019年度は、2020年3月末～4月にかけて予定していたCIFがコロナウイルス感染症のため直前に中止となった。渡米はなかったが、前述の通りの取組みを行った。

・第五福竜丸フィールドワーク（江東区）

期間：9月16日（高校2，3年生 20名）GLP生

目的：原爆の兵器使用以外での実態を学習するために、第五福竜丸の被爆実態に関する調査を博物館で行った。終了後、「核兵器の全面的廃止のための国際デー」記念平和フォーラムに参加し、これからの核兵器廃絶運動に対する識者の意見を伺った。

② イングリッシュ・キャンプ（全校生徒より希望者 39名）

創価大学にて1泊2日で実施した。留学生と3，4人ずつのグループを構成し、日本文化に関する英語によるポスターセッションを行った。

6 目標の進捗状況、成果、評価と次年度への改善点、SGH終了後の継続性について

以下の（1）～（8）の項目として報告を行う。

- （1）教育課程の研究開発の状況について
- （2）高大接続の状況について
- （3）生徒の変化について
- （4）外部テスト（学びみらいPASS） PROG-H 受験結果
- （5）アンケートと分析
- （6）教師の変容について
- （7）学校における他の要素の変化について（授業、保護者）
- （8）その他の課題や問題点について

（1）教育課程の研究開発の状況について

①スーパーグローバルハイスクール指定後、「言語科」を設け、「言語技術」の授業を1年生と2年生に1単位ずつ行った。また、これを英語科の教員とティームティーチングとして組むのみならず、担任も参加するカリキュラムとした。「日本語と英語の往還作業」の授業は本校独自のものであり、高校から始まった「言語技術」は中学校でも単位化、小学校の国語の授業にも取り入れられ、「小中高一貫」のカリキュラムとなった。これはSGH終了後も継続する。

②高校生が中学生へ、平和について教えるというアウトプットを見据えながらの、広島、長崎へのフィールドワーク。事前学習→フィールドワーク→授業としてのアウトプット→授業評価による振返り という流れを作った。2020年度以降も継続する。

③海外フィールドワークは単なるインプットではなく、アウトプットの間として臨んだ。

日本で英文でのポスターセッションスキルをブラッシュアップし、現地に行って発表して意見交換し更にブラッシュアップ、次の場所でブラッシュアップしたポスターセッションというフィールドワークにした。これには高い英語力と意欲が必要であったが、そういった生徒を育てることが出来た。それを校内に持ち帰ることによって、全校生徒に還元し、後輩へ伝統として引き継ぐことが出来るようになった。学年間の引き継ぎが綿密となり、今後の発展も望まれる。

- ④選抜生徒によるG L Pは、学校設定科目としてカリキュラム化した。中でも高度な協働的探究学習における2・3年生混在クラスの普及は、SGH以降においても有用である。これを踏まえ、現在3年生のみが対象となっている学校設定科目を、今後は2年生から選択できることも、新カリキュラム開始に向けて検討している。
- ⑤2020年度から「総合的な探究」の時間を1年生より1単位行う。その準備のため、2019年度より「探究科」を設置した。この探究科も言語科もすべてSGH委員で構成されている。これからは「言語科」と連携しながら、小中高一貫のカリキュラムを作成し自走していく。

## (2) 高大接続の状況について

- ①高大接続について、スーパーグローバル大学グローバル化牽引型に採択されている創価大学と、定期的に「高大接続ワーキング」を実施。SGHの間は、毎回の公開授業・中間発表会・活動報告会に教授に参加をいただき助言をいただいていた。また、学校設定科目で、大学教授の派遣を2019年度と同じ規模で引き続き行う。  
(主な本年度実績) 学校設定科目「平和学入門」
  - 1学期 全16コマのうち、8コマが大学教授の授業、4コマが留学生交流
  - 2学期 全20コマのうち、10コマが大学教授の授業、4コマが留学生交流
  - 3学期 全8コマのうち、2コマが大学教授の授業、2コマが留学生交流他、学校設定科目「国語演習」でも大学教授の授業も昨年と同様に行う。
- ②スーパーグローバルハイスクール指定後、本校卒業生が、大学でどのように活躍しているかを伺ってきた。SGH指定後は、言語技術の素養を持っていること、SDGsに対する問題意識の高さ、ディベートの素養、海外留学意欲の高さなどが格段に上がったことを報告として受けている。大学での授業を変えなければならないとまで評価を得た。
- ③2020年度から開始する総合的な探究の授業で、年次進行の2年生で展開する「貧困・飢餓・教育・環境・水問題・経済格差」の問題についてのアプローチで、大学での受け入れ体制を検討し、高校生が大学へ行って探究活動を行うための高大接続の会議を定期的に行った。
- ④ユネスコスクールのASPUivNET大学である創価大学、ユネスコスクールの玉川大学・小林教授よりご教示をいただき、SGH校の取組みを継続させるために、ユネスコスクールチャレンジ校となった。ユネスコスクールに認可されれば、SGH終了時点の2021年4月からユネスコスクールとなる。2019年度より実施してきたGCPの一般公開の実績をもとに、今後は大学を含め連携をとりながら、一般公開含めた情報の発信を続けていく。

## (3) 生徒の変化について

- ①学校全体がSDGsを常に意識するものとなった。さまざまな行事(修学旅行、学年行事、学園祭など)において、テーマがSDGsのものとなっている。これは、SGH終了後も継

続される予定である。

- ②英検受験率のアップと合格者の増加。特にスーパーグローバルハイスクール指定前は、英検準1級は非常に高いレベルという認識であったが、今は手の届く目標として普通に捉えられている。

英検の受験者数の推移

	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
準1級	67(6)	127(13)	204(23)	272(32)	258(25)	251(15)
1級	1(0)	6(1)	18(4)	16(1)	15(0)	3(1)

※カッコ内は合格者数

- ③スーパーグローバルハイスクール指定後の卒業生は、ほぼ90%以上が留学をしている。これは、主な進学先である創価大学がスーパーグローバルユニバーシティとして留学を勧めていることもあるが、海外大学進学が増加だけでなく、大学時における留学に対する意欲が非常に高まった。
- ④一般に行われる発表会やフォーラムに積極的に参加することが多くなった。サステナブルブランド国際会議を例にあげると、4人の招待枠に対し100人を越える希望者が出た。主催者より二倍枠の8名にしてもらって抽選を行った。すると、抽選漏れした生徒が一般で申込みを行うなど、非常に意識が高い生徒が増えた。(2019年度はコロナウイルス感染症対応のため開催されず)
- ⑤毎年マレーシア語学研修を行っているが、この希望者がスーパーグローバルハイスクール指定後に激増した。本年度は8名の枠に対し140人が応募した。(2019年度はコロナウイルス感染症対応のため開催されず)

#### (4) 外部テスト(学びみらいPASS) PROG-H 受験結果

課題であった「生徒アンケートによらない生徒の資質・能力の変容の測定」のために、ジェネリックスキルを測るためのPROG-Hを高校2年生で2回実施した。これは、ジェネリックスキルのリテラシー(知識を活用して課題を解決する力)とコンピテンシー(経験を積むことで身についた行動特性)を見るテストとなる。

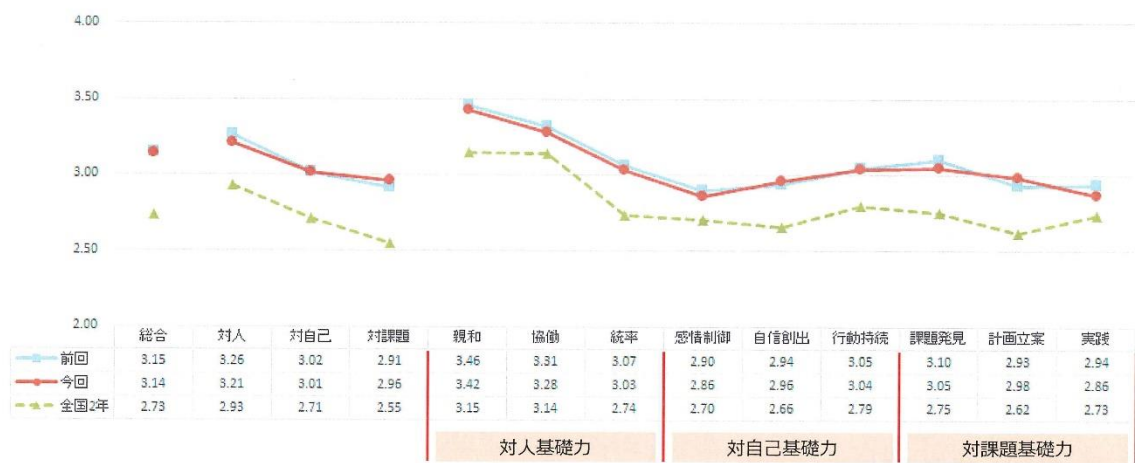
リテラシーは全国平均程度であったが、コンピテンシーの全ての項目において、全国平均より極めて高い評価を得た。PROG-H担当者からの説明では、全国上位3校に入る数値とのことであった。これは、SGHで行っているGCPを始めとした「地球規模課題」を協働しながら考えるプログラムの取り組みの成果があらわれたものと捉えている。

ただし、2回目の測定は高いレベルのままほとんど変化がなかったが、これは学校全体として、すでに高い数値を示していたことに加えて、これらの資質・能力は高校2年生の11ヶ月という短期間では変化しにくいものと捉えられる。また、個別の変化を見た際に、クラブ活動などで中心者になることによる成功感や失敗感が生じたり、将来展望に現実的になる高校2年生ライフサイクルにおける個人的な経験が大きく寄与していることが見られた。今後は測定時期および学齢の適正についても検討したい。

以下のグラフはコンピテンシーの測定結果である。



各項目の平均値 (すべて)



(5) アンケートと分析

現在の高校3年生については、入学年からのアンケート結果との比較を行った。また、語学への意欲の変化、協働能力を問う質問については、SGHに認定されて以降過去行ったアンケート結果との比較を行った。

① 「将来留学をしたい」

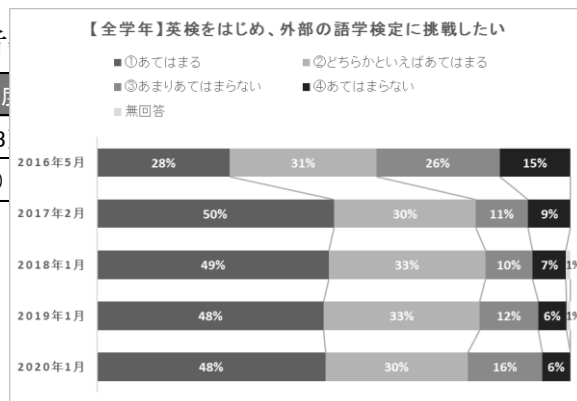
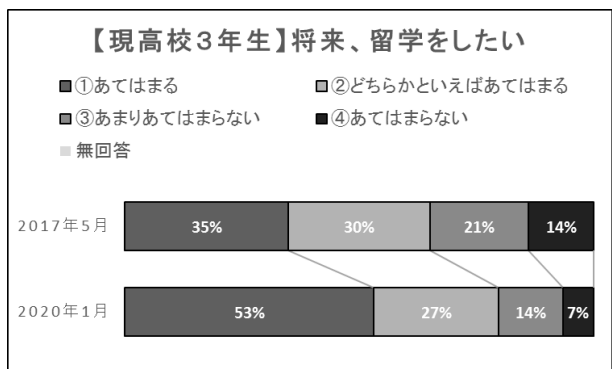
SGHの活動に3年間取り組んだ現3年生の入学時と卒業時の結果を比較した。「留学をしたいですか」の問いに対し、「あてはまる」と答えた生徒が、2017年5月では35%だったのに対し、2020年1月のアンケートでは53%と、18ポイント増加した。

② 「語学試験に挑戦したい」

経年変化を示したのが以下のグラフとなる。SGH認定後の2017年2月以降、全体の8割前後を保ちながら推移しており、語学修得に対し、前向きに取り組もうとする生徒の割合が高くなった。早い段階で高い英検を達成した生徒が多くなったための減少も見られる。

③ 英検の受験生の推移

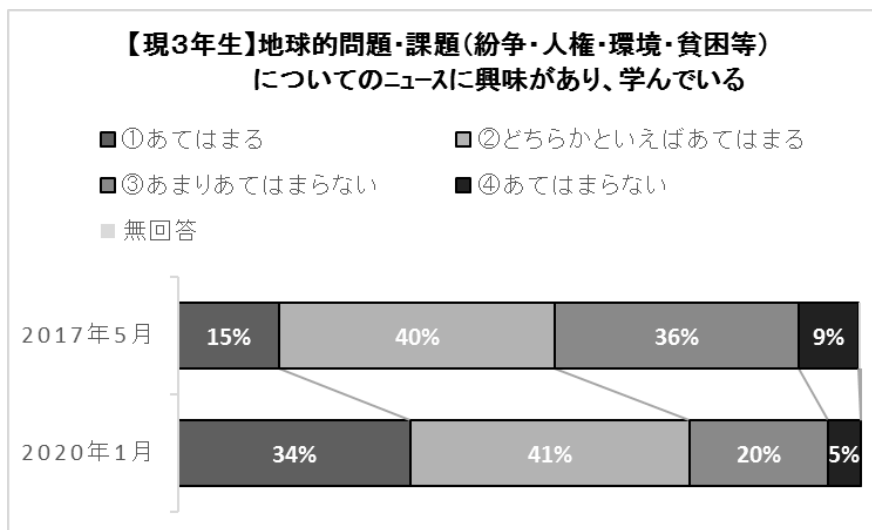
実際に英検を受験する生徒もSGH認定後に高くなっている。





④「地球的問題・課題への興味や理解」

3年間SGHの活動に取り組んできた現3年生の入学時と卒業時の結果を比較した。入学時には「あてはまる」と答えた生徒が15%だったのに対し、2020年1月のアンケートでは34%に増加した。また、2020年1月のアンケートでは「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と75%の生徒が答えており、SGHでの活動が生徒たちの地球的問題・課題への興味や関心を高め、具体的な学びにつながっていることがわかる。



⑤「さまざまな課題に取り組むに当たって、情報や意見を論理的に分析している」(以下グラフは割愛)

現3年生を入学時と比較すると、卒業時に「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えた生徒は14%も増加している。3年間の言語技術、3年次の「Final Project」を通して、情報や意見を論理的に分析する力を大きく高めることができたと考えられる。

⑥「自分の意見を筋道立てて、わかりやすく話すことができる」

2017年からの推移をみた。2017年5月では「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えた生徒は54%だったのに対し、2020年1月のアンケートでは68%となり14%増加した。言語技術の授業を軸に、他教科や学級活動の中でも言語技術で身につけたスキルを積極的に使用していくことで、対話・コミュニケーション能力に自信をつけてきていると言える。

⑦「さまざまなワーキングにおいて、友達と協力して取り組むことができる」

2017年からの推移をみた。SGHの活動が始まったばかりの2016年5月とそれ以降を比べると「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」が10%程度増加し、85%程度の高いレベルで推移している。仲間との協力なくしては成り立たないSGHの活動を通して協働力に自信をつけ、他の授業でも協働力を活かしながら取り組むことで更に協働力が高められていると考えられる。

(6) 教師の変容について

①スーパーグローバルハイスクール以後、SGH委員会を希望者で運営しているが、専任教員51名中、25名がSGH委員として希望して運営に当たっている。通常より業務が集中している教員や新任の教員には、授業準備などの時間を確保させるために、希望しても入れて

いない教員もいる。SGH委員でない教員も全校生徒で取り組むことなので、結果として全員が参画し、SDGsに関する高い問題意識を持つようになっていく。

- ②スーパーグローバルハイスクール指定前は、校内の一般公開は学園祭のみであった。SGH指定後より3年間は、中間報告会と活動報告会の2回を一般公開として追加し、4年目からは、学期2回、年6回の一般公開を追加した。これは全教職員に対して「開かれた学校」という感覚の変容と、一般公開される質の高さを求める姿勢の変容が見られた。2020年度も引き続き6回の一般公開を予定している。
- ③言語技術の授業を小中高一貫で取り組むために、小中高それぞれの学校から、毎年2名前後の教員を、つくば言語技術教育研究所のセミナーに参加させている。小学校も陣容が整ってきて、2020年度には小1～小6までの各学年で行われることが可能となる。中学校は2020年度より始まる言語技術と探究の授業に合わせ、言語技術を教えられる教員を育てている。
- ④スーパーグローバルハイスクール指定後、この4年間で「言語技術」は学校のスタンダードとなっている。話し方や聞き方、発表の仕方などが生徒のみならず教員も含め、学校全体として格段に上がったことがわかる。
- ⑤英検やTOEICに挑戦する教員が増えた。2019年度は英検1級に1名合格した。また冬季および春季の休業期間に募集した、オンライン英会話への試用実施に応募した教職員数は、延べ17名であった。
- ⑥非常勤講師の授業の質のアップをどう行っていくか課題となっている。特に退職後再雇用の教員の新しいことへの対応の難しさや、実質運営には入れないため、温度差の問題がある。2020年度は講師への連絡協議会の時間を拡大するとともに、情報共有の拡大を考えている。

#### (7) 学校における他の要素の変化について（授業、保護者）

- ①ルーブリック評価が各教科で定着してきている。また、SGHのGCPがアクティブラーニングであるため、教員も一緒になって取り組むことから、アクティブラーニングがスーパーグローバルハイスクール指定以降、無理なく行われるようになった。
- ②GCPにおいて、GCPリーダーズが主体的に授業を推し進め、教員は一部サポートするものの、ファシリテーターとしての役割となっている。このやり方が、通常の教科指導でも見られるようになってきた。例えば、物理の授業ではあえて2クラス合同で行い、学びあいの授業の空間を作り出し、効果的な学びが出来るよう実践し、実践報告会も校内で行った。
- ③保護者のアンケートの回答率が大幅にアップした。これは、スーパーグローバルハイスクール指定と共に拡充してきたICT環境の充実と教員のスキルアップ、また、保護者と一般公開での申込みやアンケートの取り方が、従来の紙ベースから変化したことにもよる。具体的には、2018年度の保護者アンケート回収率は639件で61%であったが、2019年度は944件で91%となった。
- ④上記の保護者のアンケートのうち、「SGHの取り組みを評価する」は、よくあてはまる、あてはまるが、昨年度93%に対し、本年度は92%と、回答率が大幅にアップする中で高い評価を得ている。

#### (8) その他の課題や問題点について

- ①学校のさまざまな行事などで、中心となる教員がSGH委員となっている。GLPは午後6時からの講義を行うことにより、クラブ活動などの制約をなくすことにしたが、教員負担が大きく、長く継続して行うカリキュラムとしては難しい。本年度から学校設定科目の5, 6限に展開したが、2年生のGLP生のためには引き続き、放課後の授業が必要となった。
- ②フィールドワークに向けてのカリキュラムにしているが、費用の関係から参加人数を増やすことが出来ない。今後の課題として、このように生徒の気持ちを高めることに成功したものの、希望者全員を行かせることの出来ない国内外のフィールドワークの問題、留学による単位を認められていない点、「トビタテ！留学 JAPAN」への希望者の増加に対する担当教員の不足など、受け皿の増加を検討していく。
- ③他のSGH校との連携に広がりを持てなかった。広島女学院高校、那覇国際高校、関西創価高校とは定期的に繋がりを持てたが、他のSGH校との情報共有が薄かった。2020年度はSGH校が11校のみで、どのように広がりを持ち、情報共有をしていくか課題となっている。
- ④成果の普及に困難を感じている。小平市市長、教育委員会へも再三働きかけを行い、地元の小中高への働きかけも行ってきたが、発表の場や教材の展開までは出来ていない。話をする中で、SDGsが必要であることはよく分かるが、学校現場ではそこまではまだ出来ないとの声が多かった。唯一の生徒派遣の要望は、放課後の英語クラブに来てもらいたいのみであった。現在、出前授業として成功しているのは、創価中学校への授業のみとなっている。これを最終年度、どのように広げられるか検討している。

## 8 管理機関の取組・支援実績

- ①運営指導員（無藤隆白梅学園大学名誉教授、遠藤誠治成蹊大学教授、村上清岩手大学学長特別補佐）に加え、アドバイザーとして、佐藤悟元ブラジル大使、飯田順三創価大学法学部教授にお願いした。
- ②運営指導員またはアドバイザーに、中間報告会と活動報告会に加えて、年6回のGCP一般公開に来校していただき、きめ細かくその都度アドバイスをいただいた。
- ③フィールドワーク他、費用の面でも多くの支援をいただいた。
- ④管理機関が同じく管理する、本校の姉妹校である関西創価高校が、2019年度を持ってSGHを終了するが、終了後も支援をいただくことになった。本校も2020年度で終了となるが、同様な支援をいただき、現在展開している教育内容を自走できるようご支援をいただけるよう検討を開始した。

### 【担当者】

担当課	経理募金課	TEL	042-342-2611（代）
氏名	山下 英一	FAX	042-342-2617
職名	副課長	e-mail	yamashita@soka.ed.jp